授業情報誌Class第９号発刊にあたって

研修はワクワク、真摯に

新潟県中学校教育研究会は昨年度創設60周年、そして、今年度新たな61年目のスタートの年となりました。今年度の事業リーフレットには３つの重点が示されており、その１つに、60周年記念講演会の講師の田中博之様の提唱されている「深い学びの20技法」をもとに「深い学びにいたる授業」を提案していくことなどが掲げてあります。それらも含め、我々の研究の質的向上を図っていきましょう。

研修はワクワクして行いたい

私は教員の職務には２種類あると思っています。１つは、アレルギー対応など生徒の生命にかかわることや、個人情報の管理、受検の事務など、100％確実に遂行することが要求されるもの。もう一つは、学習指導や学級経営など、必ず100％確実な遂行をしなければいけないというものでもないものです。前者はピリピリして取り組むものですが、我々中教研の研修は後者の方で、だからこそワクワクして臨みたいものだと思っています。

私が若いころ、理科の授業で生徒たちに元素記号を覚えさせたいと、100％を目指し毎時間の初めに小テストを繰り返し、時には、昼休みなどに再テストを行うなど徹底的に取り組みました。しかし、約１か月後の定期テストでは、生徒たちの習得は100％に至りませんでした。ある年、小テストをやめて元素記号のカルタ取りを毎時間授業の初めに行いました。生徒たちは楽しそうにカルタ取りを行ってくれ、私自身もワクワクしながら行うことができた記憶があります。結果、習得状況は小テストを繰り返した時とさほど変わらなかったと覚えています。

アレルギー対応や個人情報の取り扱いのように100％完璧におこなうべきものとは違うのが、学習指導であり（勿論、100％習得させたいこともありますが）、また、正解のない問いを追求していくことが、これからを生きる子供たちにとって大切になってく時代だからこそ、まさに「ワクワクして」は、キーワードであると思っています。我々教員も生徒も、毎時間そんな姿勢での授業や研修に臨むことができればと思っています。

新潟県中学校教育研究会
副会長　**伊藤　法生**
（長岡市立東中学校 校長）

昨年度、中教研の会議で五十嵐会長があいさつの中で、このClassに写っている先生方の顔写真がみなさんにこやかでワクワクした表情で写っておられることに触れられていました。担当した研究には苦労も多いと思いますが、中心となって取り組んでいる先生方の前向きな姿勢がその写真の表情に表れていると言っておられました。今後も、中教研の活動がワクワク感をもって進んでいくことを期待せずにはいられません。

中教研の意義

10年以上も前の話ですが、ある県外の研修会に参加した際、私立中学校の教員と話す機会がありました。その私立学校では教員一人一人にいくらかの研修費が配当されていて、教員がそのお金を使って、個々にいろいろな研修会を探してそれに参加したり、先進的な学校に訪問したりして勉強していると言っていました。確かに、公立学校の教員のように、県センや市センの研修や中教研や市教研などの研修機関での研修の機会がない私立学校の教員は、そのようにしてしか研修ができない環境に置かれていると感じました。

生徒に、「世界には、学校に来たくても来れない生徒がたくさんいるんだ、今ある状況に感謝して勉強しなさい」というようなことを、私自身も含め、言ったことのある先生方も多いのではないでしょうか。私立学校の先生に比べて我々は恵まれているということであると思います。豊富にある研修の機会を積極的にとらえ、研修に真摯に取り組むという姿勢を大切にしたいものであると思っています。

この中教研の活動が、先生方の日々の研修の良いきっかけになったり、また、できれば中心的役割に少しでもなればと思っています。研修は、自分の力量を高めるためですが、結局は、すべては子供のため。今後も、先生方がワクワクしながら、そして真摯に研修に取り組んでいくことを期待しています。